

## 「望月」を歩く

滋賀県守山は京都から大津宿、草津宿を経て信濃に向かう中山道の宿場町です。草津宿までは東海道と同道であり、「京発ち守山宿泊まり」といわれ中山道を行く旅人が最初に宿をとるのが守山宿です。京都と信濃の往来のかなめ、能「望月」はまさにこの守山宿が舞台であることが必須の条件といえます。

京都駅から守山までは、JR琵琶湖線で山科駅、大津駅、草津駅を経て九駅目、各駅停車で三十分ほどの距離です。JR守山駅に着くと、米原方面のホーム横に隣接するコンビニに人の流れができます。何かと思つて後に続くと、なんと、IC専用改札口がコンビニの店内にありました。

まずは、駅に隣接する「守山市駅前総合案内所」にお邪魔し、守山宿への道順を確認しました。守山商工会議所が運営する同所は守山の観光情報から土産物、地域の展示コーナーに加え、親切なスタッフが丁寧に応対してくれます。守山周辺の地図を頂いて早速出発しました。

駅前の守山銀座を抜けると中山道に突き当たります。ちょうど、JR線と並行する位置です。車が往来する広い守山銀座の角を一步曲がると、歴史を思わせる古い街道が目の前に現れます。なんとも落ち着いた街並みです。「望月」の舞台とされる宿屋甲屋は駅から徒歩十分ほどの「中山道街道文化交流館（旧山中油店）」あたりとされています。交流館の方のお話



↑ JR 琵琶湖線ホームのコンビニ改札口



↑ JR 守山駅



↑ 旧中山道 守山宿の街並



↑ 守山駅前総合案内所

廣田 幸稔

によると、元々本陣のあった場所に明治初年「甲屋跡」として石碑が建てられました。歴史的検証から現在は「本陣跡」に修正されたそうです。大名の宿泊所である本陣が普通の旅人が泊まれる宿屋だということもおかしな話です。というご説明でしたが、なるほどと思いました。間違っていたとはいえ、「本陣跡」ではなく「甲屋跡」の石碑が建てられたのは、逆にいえば、それだけ「望月」の逸話が浸透していた証拠かもしれません。石碑を見ると、上から一枚薄く張り替えられた跡がわかります。文化交流館には大名行列や朝鮮通信使の往來の資料などが展示され、異国の珍しい人やモノ、動物までが行き来した当時の賑わいが忍ばれます。宿場や茶屋が立ち並び、人や情報が集まる交通の要所です。平治の乱では源頼朝が守山宿を敗走し、江戸時代には歌川広重が「木曾街道六十九次」に浮世絵を残し、幕末には皇女和宮の花嫁行列が泊まれたことも有名です。

さて、「望月」の曲中、主君の妻は盲御前に扮して『曾我物語』の一節を語ります。室町時代に成立されたという「七十一番職人歌合」の二十五番に琵琶法師と盲御前が描かれています。琵琶法師は『平家物語』、盲御前は『曾我物語』を語り、生業としていたそうです。『曾我物語』は曾我兄弟十郎、五郎が父の仇・工藤祐経を討つまでの仇討の物語です。能『望月』は架空の物語ですが、守山宿という舞台設定、曲中の『曾我物語』など、仇討の物語には欠かせない要素を揃えたところも、この曲が長く愛され語り継がれた背景だったのではないかと思います。



↑中山道街道文化交流館



↑街道沿いの道標  
「右 中山道井美濃道  
左 錦織寺四十五町このはまみち」とある



↑「本陣跡」の表面上から一枚貼られ修正された跡がわかる



↑「本陣跡」の碑と古井戸